

地方民紀行鉄

豊橋鉄道株式会社



地元の生活にすっかり根付いた路面電車の市内線と渥美線。新聞づくりの「取材」に励む小学生は、慣れ親しんだ2路線に何を発見するのだろうか。

「市電の路線 今と昔を比べてみよう」
「探してみよう! 市電沿線スポット」。

豊橋市内を走る路面電車、豊橋鉄道市内線の歴史や名所をパネルで紹介しているのは豊橋鉄道の資料室……ではなく豊橋市役所。

「とよはし物語館 市電とともに歩むまち」と題された展示フロアは13階の最上階。広々としたスペースの壁面には、豊橋市の歴史と市内を走る路面電車の歴史を対比させた年表で、豊橋市ができた1906年から始まり、新型車両「はつトラム」が導入された2008年まで紹介されている。傍らには「とよはし市電を愛する会」と添え書きのある市内線の模型も置いてある。

「東海地方唯一の路面電車ということで、市役所の方でも市内線の紹介をしてくれています」と伺って足を運んでみたものの、まさかこれほど大々的とは。

「当たり前」が「愛される」

豊橋鉄道市内線は、JR豊橋駅に隣接する駅前電停から、赤岩口電停または運動公園前電停までをそれぞれ片道約22分で結ぶ。駅前電停で、しばし電車の行き来を見守れば、その「愛され具合」はすぐ分かる。

市内線16編成のうち、新型車両の「はつトラム」と「ビール電車」、警察と共同したパトカーのようなデザインの「パト電車」を除く13編成すべてが、豊橋市に縁のある13の企業によるラッピング電車。つまり、市を挙げてのPRにとどまらず、地元企業の強力サポ

トも受けているということ。

中には、黒地に赤と黄色の配色に「豊橋にはこれがある!」のキャッチフレーズまで施された「ブラックサンダー号」など、かなり目を引くデザインもあるけれど、地元企業の広告に慣れて馴染んだ地元の人々は、当然、驚きもしない。

多種多様なデザインの電車を特に気にする風もなく、当たり前になり降りていく乗客は、ほとんどすべて地元の人々。沿線に競技場などスポーツ施設が点在するため、最寄りの電停では、スポーツバッグを抱えた中高生が続々と乗り込み、賑やかな笑い声が車内に響く。そんな様子はごくごく普通の生活路線。

「東海地方唯一の路面電車」であることは注目されるポイントだけど、「愛する会」がでさるほど市内線が愛されている、一番大きな理由はきっと、そこにあるのが当然だから。ブザーンとのどかな警笛を鳴らして走る姿が、町の歴史と生活にすっかり根付いているから。

10の花咲くカラフルトレイン

さて、市内線の始発・駅前電停から数百メートル離れた所に、豊橋鉄道のもう一つの路線、渥美線の始発駅・新豊橋駅がある。

こちらはどんな電車かといえば、「通勤通学利用がほとんどの、普通の電車です。市内線ほど目立ちませんが、沿線途中から、周辺にキャベツ畑が広がり始まります。その景色は、私は好きです」と、豊橋鉄道鉄道部の長田課長。ならばひとまず始発駅から終着駅まで



13編成のラッピング電車のなかで、一際目立つデザインはやはり「ブラックサンダー号」。



豊橋鉄道

【とよはしつどう】

豊橋「駅前」から「赤岩口」「運動公園前」までを結ぶ路面電車の市内線と、「新豊橋」から「三河田原」を結ぶ渥美線の2路線を運行。





「菜の花が好き」「ひまわりがいい」と好みはさまざま。
カラフルトレインの評判は上々。



飛び出すカードのように立体的になる渥美線の1日乗車券。
カラフルトレイン10編成が描かれている。

車窓の景色を眺めに出発。

渥美線の1日フリー乗車券を買ったところには「カラフルトレイン」の文字。渥美線全10編成の電車に、渥美半島に咲く10の花を一つずつ配して、10色の「カラフルトレイン」として順次お目見えしていく、渥美線が走る田原市と共同した取り組みだ。これに合わせてリニューアルされた1日乗車券もカラフルで、メッセージカードのような愛らしさ。

乗車券を眺めつつ乗り込んだ電車は、ピンクのラインに「つつじ」の文字と絵柄のヘッドマーク。取材当日までにお目見えしていたのは8編成、秋にはすべてが揃うという。

風が渡る緑の光景

終着駅・三河田原駅までは片道約35分。愛知大学前駅を過ぎた辺りから、沿線に緑が増え始める。長田課長が「好き」というキャベツ畑の光景は、残念ながら季節が違っても今は赤土。代わりに、広がる緑が目をついた植田駅で途中下車。

広がる緑は、まだ実の固い田んぼの稲穂。駅からほんの数メートルで、周囲は一面の田んぼ、一面の緑。ゆるい夏の風が稲穂を揺らし、さわさわと淡い音が広がりが消える。「風が渡るってこういうことか」と、暑さを忘れて辺りを見渡し立ち尽くす。

日ごろパソコンとにらめっこばかりして狭くなった視界が一気に広がる。なんだか視力が良くなった気がした瞬間、視界の端に飛び込む緑の影。バッタかイナゴか、都会では

あまり見かけないサイズの昆虫が、気付けばあちらこちらに跳ねている。忘れかけた暑さがじわっと舞い戻る。緑の海は昆虫王国。よそ者の侵入者はすみやかに退散。汗を拭いて、次は車庫のある高師駅へ。

読みたい！子どもたちの学校新聞

高師駅に到着し、隣接する車庫を覗いてみると、停められた電車の側には10人ほどの子どもたち。愛知県の小学校では、夏休みの自由研究などで新聞づくりに取り組むことが多いらしい。豊橋鉄道でも、新聞のテーマに地元の電車を選んだ小学生の「取材」を受け入れているという。

「関係者以外立ち入り禁止」の鉄扉の向こう、子どもたちは電車の陰に消えていく。何を見ているのだろうか、なんだか少し羨ましい。高師駅のホームに戻り、ホームの上から車庫を覗くと、子どもたちの姿はゆっくり動く電車の中。どうやら洗浄中の電車に乗せてもらっていたらしい。遠目にもはしゃいだ様子が見て取れる。

「昨年まで、見学希望は市内線だけでしたが、今年はカラフルトレインが始まったので、渥美線も始めてみました」とのこと。渥美線に小学生の取材が来るのは初めて。高師の車庫を取材中の子どもたちは、数日前には市内線の取材もしているというが、市内線と渥美線、子どもたちはどう見たか。

新学期の小学校、出来上がった新聞にはどんな記事がトップを飾るのかな？



車庫の中を取材中の小学生たち。洗浄中の電車の中に、乗っているのが遠目に見える。



青い空と緑の稲穂、間を走るのは「ひまわり」のカラフルトレイン。